

機能主義批判の現段階

安西文夫

I

10数年まえ、私は機能主義を批判して孤軍奮闘するラルフ・ダーレンドルフの論争をとりあげた。〔1〕「20世紀中葉の数10年、社会学理論において圧倒的の支配を占め」〔2:49〕たタルコット・パーソンズを中心とする機能主義者は当時まだ強大な勢力を誇っていた。機能主義の原型パーソンズに対して蟻螂の斧をふるうダーレンドルフはロバート・K・マートンには「武装解除の単純さ」とあしられ、Ch. ジークリストには「ダーレンドルフの決定的独行は紛糾をかもしだすのにまさに適しているが、私の考えるところでは理論的知識の集積をもたらすものではない」〔2:212〕と論難されて、少数派の悲哀をかこった。10年余を経過したいま、事情は大はばに変化したのである。主として社会学的理論の領域で、しかしひろい範囲、諸種の水準での激烈で徹底的な批判が展開され、攻防をめぐる位置は逆転し、「攻撃は頻繁でひろい範囲にわたるのに防衛と反攻が貧弱なのは驚くほどである。点数をとっていた観察者ならば機能主義は敗北したと結論をくだしたい気になる」〔3:49〕事態が生じたのである。「主座の地位からの機能主義の転落」が決定的となった。

機能主義の敗北という結論について、マーク・アブラムソンはそれが正しくないことを主張する。「防衛が相対的に欠けているのは部分的には機能主義の社会学的理論に占める歴史的な中心性によるのである」とし、「蚊の大軍がおしよせても、刺す針をものともしないで、ぶら

ぶら歩く巨象」のような機能主義者と、わが道を行くがもはや見向きもされない「わら人形」の機能主義者があって、ともに批判に対する抵抗を必要としないし、また「真摯な」批判は「この学問の知的生命に深い結果をもたらす。」〔3:37〕とする。

機能主義に対する「真摯な批判」の1つの例をわれわれはアンソニー・ギデنزのそれにとめる。彼の批判は生き残りを賭けた機能主義を葬って、新たなパラダイムを提起する気概をもって徹底的に、また特定の社会学的理論体系の確立の裏づけをともなって体系的に行われる。われわれはダーレンドルフの機能主義批判について3つの限界を挙げた。そのそれぞれについてギデنزの批判の性格を対照させることができよう。第1の限界はダーレンドルフが機能主義のあらゆる形態を批判の対象とするのではなく、当面の対象としてのパーソンズのそれとは「対立的な立場の機能理論」のあり得ることをみとめ、パーソンズの立場との共存をすら示唆するところにある。ギデنزはこれとは異って、機能主義の一切を是認せず、いかなる形態の機能理論をも、社会学的理論として不要であるばかりでなく有害なものとして排斥する。第2の限界は「急進的社会学」に対するダーレンドルフの消極的態度に見られる、保守主義に対する宥和的で、ときとして韜晦的な姿勢につながる批判の不徹底である。ギデنزは保守/進歩のいずれかの側に立つことを声明する表面的な熱っぽさを示さない。彼の関心はもっと冷静である。特定の学問の更替をめぐる政治的運動

と科学的積極性を区別する人もあるが、彼は後者に沈潜する。というよりも後者こそが前者を規定すると考えるのであろう。なるほどおしつけがましい「規範的機能主義」には、いたるところで戦闘意識をむきだしにし、この高圧的な現状維持の正当化に対して、マートンが「逆機能」に関連する闘争の可能性をつきつけるのを「魅力あるもの」〔4:127〕ともする。また「マートンの論述は最もリベラルな型の機能主義」とも評価する。〔4:121〕しかしマートンに対するギデンズの温和な態度は前者のリベラルな性格に対する政治的観点からの同情を意味するものではなく、彼の処論に見られる学問的長所と目されるものに関連するのであろう。

ダーレンドルフの批判の第3の限界は、批判の対象を特定の人物パーソンズに限定することから生ずる。すくなくとも20世紀中葉のアメリカ社会学の主流を占めたパーソンズは彼にとって最強で、また対抗するに最適の論敵であった。ダーレンドルフはパーソンズの権威に眩惑されて、他の穏健で建設的指向をもつ機能理論家たちを過小評価し、これらを批判の対象とすることを怠った。今年年月の経過とともにパーソンズは行動と体制の規範的側面に偏執する、誇大な「わら人形」と化したのである。ギデンズはデュルケイムともつながるパーソンズの「規範的機能主義」の歴史的意義については、くりかえし検討を加えるのであるが、それを批判することによって新たな方向が開拓されるほどの現代的意味をみとめ得ない。このようにしてギデンズにとって批判の新たな標的はマートンに置かれることになる。ダーレンドルフのマートンに対する過小評価と異って、ギデンズの場合にはマートンにおける問題処理の精妙な諸種の *sophistications* が敬意をうける。これがマートンを「規範的機能主義者」から、また自らを「機能主義者」と称することも、他から称

せられることをも、忌避するほど凝った機能理論家としてのマートンを、集中的には原則として単純なパーソンズから、区別するところのものである。

II

ここでパーソンズとマートンとの対照をしばらく検討してみたい。

機能理論家としての二人の立場は対蹠的であるばかりでなく、生涯を通じて相容れない対立的なものであった。隣接する地にアメリカ社会学の本拠を樹立した二人は機能主義を中心に或いは提携的或いは補完的な関係を通じて友好的であるように誤解されることがある。パーソンズは1947年アメリカ社会学会会長就任演説に対するマートンの弾劾的批判をきっかけに「僚友にして、かつての門下生」に考えかたの歩みよりに呼びかけ、以後いくたびか、その試みはくりかえされた。しかしマートンのパーソンズ糾弾はその勢いを変えない。両者の対立はすでに40年末に歴然としていたのである。ところで機能理論家としての出発は年少のマートンが先鞭をつけた。カール・ヘンペルのいう「光明に充ち、豊かに綴られた論文」「顕在機能と潜在機能」〔7:73 et seq.〕の作成は40年代初期に属する。パーソンズにおける「社会体系」を軸心とする機能主義の明確な成立は同名の著書の発行された1951年をあてなければならぬ。それにもかかわらず機能理論の *priority* を受ける当然の権利をもつマートンがパーソンズの良き祖述者として、或いはダーレンドルフによれば「最も有名な門弟マートンの、その師の基本的指向の『水で薄められた版』」の作成者として処遇される〔10:163〕のはまことに奇妙なことである。事實は両者の機能理論は本質的に異っていて、その間には一致も歩みよりも期待できない距離をもってへだてられているのである。

この不一致はもとより両者の性格の相違などに帰せられ得るものではない。ハーヴァートとコロンビアの隣接するアメリカ社会学のオリンピアで育ったR. ニスベットとL. コーザーが両者のつながりについて数年まえ対談する機会があった。「ふたりの心性はまったく異っていて、相手が居なくても各々が必然的に自らを創造した」というニスベットに、コーザーは同意し、パーソンズのカルヴィン主義的真摯はマーソンの遊びにみちた知性には欠けており、荒削りの彫板に刻みこまれた性急なメッセージをふりまわすことに忙しいパーソンズには優雅のために憂身をやつするマーソンの精緻な体系化は求められないと答える。パーソンズの世界は社会学者の心性の中に固定されるべき一致の統一的な固形性のそれであり、マーソンの世界は社会学者によって分節化され、近接し得るものとされる必要のある、角逐しあい矛盾する要求や必要の多義性から成る。ギリシャの詩人にならって、「巨大なひとつの事を知るやまあらし」と「多くの事ごとを知るきつね」にもたとえられる。しかしニスベットとコーザーの眼には、やまあらしときつねが手をつなぐ姿が儀礼的にしか浮んで来ないのであるが、温情にみちたこの対話はそれなりにほほえましい。〔11: 5-6〕

しかし現実の事態はもっと苛烈であろう。パーソンズとマーソンの立場の対決は上述の1948年の前者に対する後者の糾弾に画期的な道標を示す。「そのあらゆる示唆性とあらゆる輪輿の美をあつめた荘麗とあらゆる科学的不毛とをともなう過去の哲学体系の、20世紀における等価物」〔8: 166〕とはパーソンズの「ひとつの理論」すなわち時期尚早の全一的統一理論に向けて発せられた呼名である。周知のようにこれは C. W. ミルズの Grand Theory につながる。〔12: 33-59〕演繹的で高い水準をもち、プログラムので現実を超えて飛翔するユートピア的なパーソ

ンズの観念性との間にマーソンは遙かな距離を感じるばかりでなく、このパーソンズの統一理論が学問の世界で活動することに、いいしれぬ危険をおぼえるのである。マーソン自らは経験的認識に出発する、下からの問題追及に信頼をおく。具体的には「理論」と「調査」との関係に力点がおかれ、それらの相互影響による統一は中間範囲の諸理論を展開させる。永らくアメリカ社会学の悪夢であった理論と調査の悲劇的分裂に対する「コロンプスの卵」としての「中間範囲の理論」はひろく支持された。マーソンが辛辣な攻撃を加えた2年後にパーソンズは、その標的とされた一般理論の提唱が「スペンサー型の思弁の体系の復活ではない。」と答え、「マーソンの危惧は……根拠のないものである。われわれはこの種の陥穽に対して自らを守るに足りる水準の方法論的成熟に達した。」〔13: 352〕と応答する。約10年後、パーソンズは「社会学における一般理論」をいく度目かに再論するが、1947年の論争を回想し、当事者の双方について「この間の数年、両戦線における、また或る程度まで両水準相互の連繋での相当の発展があった。」〔14: 3〕と主張する。しかし彼らの間に何らかの歩みよりがあったとは思えない。一方は60年代にかけて経験的認識への多少の留意および新進化論にもとづく変動論の追加を含むとしても千篇一律の統一理論に固執し、他方は理論の多元性を擁護する立場をいささかも譲らない。

「体系分析が社会学的機能主義に中心的である。」〔15: 143〕と見るアーヴィン・グッドナーはパーソンズとマーソンの機能理論の定式化において、ともに体系概念が軸心的役割を演ずるとしながら、体系モデルに対する両者のかかわりに程度の差をこえた相違を見ている。パーソンズの場合は身も心もすべてをあげてのとりくみであるのに、マーソンは最小限のとりくみによ

る戦略をもってあたる。パーソンズの「社会体系」は前記の画期的著作の題名であるとともに彼の機能主義の看板でもある。マートンの場合には、この呼称は前記著作⁽⁷⁾の索引の中に一個所でふれるだけである。その細心の処置は版を重ねて変化を見せない。すなわちマートンにおいては体系概念は慎重に回避され、正面からのアプローチの対象となることがないのである。グッドナーは体系分析がこの人の機能分析の処方の中に入りこむ場合として、問題の単位が体系として連結される構造的文脈をとり扱うとき、およびその単位を相互依存的諸部分より成る副次体系として分析するときと見る。^[15: 144]すでに「機能分析の基礎的パラダイム」の中に盛られる構造的強制にも見られる構造の体系的性格は明示的に認められるところである。それにもかかわらず「構造」も「社会体系」もともに本格的な分析に付せられないのである。マートンの体系概念の回避は問題追及の根元における演繹的手法の排撃と経験的操作への依拠に関連する。

出発点で訣別した二人はついに一方の死去にいたるまで接近する機会も必然性をもつことがなかった。今世紀中葉のアメリカ社会学において機能主義が支配した時期は、このアメリカ社会学にとって繁栄の時期でありながら、他面において慢性、急性の危機の連続をも示す。グッドナーはその到来を短く見積もるがマートンはそれを「控えめ」のものとし、「多大の説得力をもって社会学はその歴史を通じて危険の状態にあったと主張し得る。」^[9: 21]と主張する。いずれの科学にも危機は不可避であって、その克服は無力化した古い理論体系の退去をとまなうにしても、つねに新しい出発によるその科学の繁栄をもたらす。社会学も例外ではあるはずがない。危機について楽観的なマートンは、ただ特定の学問体系が画一化し、固化して、自らの

手法を絶対化してそれ以外のすべてを圧殺し、単独の存在を複数のパラダイムの自らへの「収斂」として喜ぶ事態にこそ、真の危機感をおぼえる。「社会学の慢性的危機は学説の相違、競争、および衝突をとまなうが、ときとして急性の危機を処理するのに提案される治療法、すなわち社会学的真理への全面的で独占的な接近を提供する見込があるとされる単一の理論的展望を規定することよりは、ましであるように見える。」^[9: 28]後者の治療法を提唱する一元的な統一理論こそは、つねに多元的な意見の並存を忌避し、理論的終結への尚早の要求をかかげる。

「これは静止に導く。すなわちひろい範囲の社会学的諸問題を研究する網羅的な導きであると要求する単一パラダイムへの尚早の意見の一致の結果として、まさに社会学的研究の停滞に導くのである。」^[ibid.]——それがパーソンズその人を指すのはいうまでもない。「パーソンズは門下生たちというよりも、主として批判的な追隨者から成る学派の指導者として身を現した40年代を通じて、理論的一元論を唱道してきた。彼のことばでは『専門集団』——熟練した社会学者の集合体——の内部で展開された、当時流行の諸種の理論が『単一概念構造の展開に収斂する』（パーソンズ）であろう『いくたの見込がある』とされた。」当時「パーソンズの学生の一人は理論の多元性のありかたを観察し、その効用を唱道することによってこの一元論的指向に反対した。」この学生がほかならぬマートン自らであって、「意見の対立は……深刻であった。」^[9: 40]と証言する。

ここで特に強調しておきたいことは、第一にマートンが、社会学がおかれている1975年現在の状況において、40年代にいささかも劣らない鋭い鋒先を向けてパーソンズの役割を批判すること、第二にマートン自らの積極的な分析の手法を「構造的」と称してあらためて展開しよう

としていることである。

III

ギデンズは1977年、機能理論をめぐる論争のゆくえについて述べている。「機能理論の長所と短所に関する論争は50年代、60年代の社会学および人類学における多くの理論的論議に影を投げかけているが、今日では消え去ったように見える。時折とり残された火花が引続き散らされているが、戦場はおおかたがらあきになった。戦塵もおさまって今はこの論争の遺物を吟味するのに適当なときである。」〔4:96〕孤立無援の戦いに奔弄されたダーレンドルフに比べるとギデンズの立場はまことに恵まれている。とはいえ機能理論の勢力の衰退にともなって諸種の決定論や相対主義が抬頭して来たことはマートンを始めとする多くの人々が指摘するとうりであって、「戦いの後」にあらわれる事態に、どのように対向するかの問題こそがギデンズの関心の核心でなければならない。そのための戦略的意味を多分にもつものとして彼の機能主義批判は解釈されよう。彼はそのきっかけを「機能理論の思考における固有の欠陥の或るものを見きわめることによって、それに代り得る理論的構想の根本を展開すること」〔4:96〕にみとめる。

ところでギデンズは「残りの火花」の中に、すでにパーソンズを含めない。もともと「最近の批判的分析の或るものは構造・機能理論、より特殊的にはパーソンズの考えかたが、アメリカ社会学を支配した程度を誇張する傾向が明らかにあった。」〔4:361〕とも言い、また「パーソンズの著作は不分明ないし宣伝的なものとして、ひろく肩をすくめられてきた」〔ibid.〕ともする。そのうえパーソンズの「機能主義」が「同情的および批判的の双方の著者たちによって種々様々に理解されていることは隠れのないことであった。」〔4:98〕と主張して、「それに代えて私は

他の著者たちによる3つの寄与に私の注意を向けることにする。」〔ibid.〕「R. K. マートンの機能的説明の課題のコード化とE. ネーゲルによる、これについての批判的修正」および「A. L. スティンチコウムのこれに関する検討」〔4:98-99〕が挙げられるのである。この場合ギデンズの批判の中心的対象はマートンの処論であって、後の二人は補助的な意味で付加されるにすぎない。

ギデンズはマートンの機能理論に対する批判的評価に移るにさきだって、社会諸科学において機能分析的観念ないしアプローチが、あれほど多くの人びとを牽引するのは何か、を問う。〔4:104〕発生的には19世紀の機能分析が典型的に示すように先進科学としての生物諸科学が手本とされたことが想起される。進化論との訣別以後も、とりわけ生理学的モデルすなわち身体の解剖学と生理学、*Bau und Leben* がその対応物として社会の構造と機能の概念をよびおこす。私は初期からパーソンズにいたるまでの社会学が社会有機体説的構想にいかにも強く浸潤されたかを中心に、社会学における類推の問題を検討したことがある。〔16〕もともと類推とは研究の或る対象領域において得られた認識を、これと質的に異なる他の対象領域に転用することである。類推はわれわれの安易な認識態度に迎合し、未知の世界の理解に多大の啓示的な効果をもたらすものとして魔術的な魅力を発揮するのであるから、借用する側の領域の特殊性を無視し、それに固有の認識の成立を阻止する役割と、その領域とは次元を異にし、したがって異質の認識をもちこむことによって誤謬、附会、歪曲を結果するそれとの二重の破壊的な過失を犯すことがある。機能主義と生物科学的モデルとの結びつきは発生的事情を含めて本質的なものと考えざるを得ない。したがって機能主義の個個

の試みがどの程度まで類推を含むか、またそれによってどのようなことが見のがされ、どのような正しくない認識が結果されるか、が細心の注意をもって観察されねばならない。〔16〕

マートンは「他の諸学問における先行の経験が社会学における機能分析に有益な方法論的モデルを提供する可能性」を認めるのであるが、類推に対する厳正な警戒を怠らない。続けて彼は言う。「これらのしばしばより精密な諸学問の分析的手続の諸規準から学ぶということは、しかし、それら特有の概念や技術の全部をあげて採用することではない。たとえば生物諸科学において用いられて成功を収めた手続の論理から利益を得るということは有機体説的社会学の信者たちを永らく魅了した、大部分は見当違いの類推や比喩の承認に後退することではない。生物学的研究の方法論的枠組を検討することはその実質的な概念を採用することではない。」〔7: 102〕ギデンズはこの種の類推に対するマートンの姿勢を高く評価する。さらにはマートンは生理学者 W. B. キャノンの“social homeostasis”に関する「不幸なエピソード」〔7: 101〕を「生理学的有機体と社会体系との間に実質的な類推や比喩を行うことに手をつける」とちまち一人の卓越した心性でさえ連れ去られる実りのない極端の例」〔7: 102〕と見る。このマートンの態度は、生物諸科学への類推に全面的に感溺するパーソンズのそれとは、はるかな距離をへだてるものである。〔16〕その点ではマートンの処論を強化するはずのネーゲルに近いカール・ヘンペルが巨視生物学を、またスティンチコウムがクロード・ベルナールを援用しようとするのは、マートンの慎重な態度には逆行する。

とはいえ近代科学の諸部門、諸分野の間に密接な交流が行われるのは無視され得ない。特に機械的な直接の類推ではなく、特定の科学を通じて、或いは媒介として諸科学にとって一般的

なものを教えられるということはある。ギデンズは「社会諸科学と生物学とを結びつけようとする努力を刺激した主要要因」〔4: 104〕として3つをあげる。要因の第一は「自然科学がすくなくとも閉鎖体系や要素の集合集群よりも複合的な『開放』体系をとりあつかうかぎり、社会学と自然諸科学の間に論理的統一があることを立証しようとする願望」〔ibid.〕である。そこから社会学にも複合的な開放体系の概念が導入される。第二は「諸部分の相互依存により全一化された統一」の概念であって、相互依存は相反効果と均衡の概念とともに、いやおうなしに社会学の世界にもちこまれる。生理学における homeostasis の原理がそれである。これら2要因は「機能」と「構造」、およびそれから派生する諸概念に乗って様様の影響を社会学にあたえる。第三は生物学的範疇に属する特定の場合に内蔵される「目的論的要素」であって、社会学的機能理論に微妙で、しかもその深部に達する決定的影響をもたらす。「社会が存在を維持するには、充足されねばならない社会的ニーズがあるという論旨ないし仮定に、つねに社会学的機能理論は依存する。」〔4: 105〕たとえばマートンにおける潜在機能こそは社会的諸慣行（たとえば雨乞い儀礼）や社会的諸制度（たとえば宗教的行事）がそれに含まれた行為者の表向きの目的からは必ずしも推論され得ない目的を証明するという機能理論の全一的特色、すなわち「隠された目的論」を端的に示すものである。

1977年の段階ではギデンズは機能理論の基本的趣旨を3つにわけ、これらについて批判を行う。第一は機能理論における意図のないし目的的行為の意味に関連して、結論的には機能理論が目的的人間行為の限定された欠陥のある説明しか許さない目的論的理論であると帰結する。行為の「主観的意図」と「客観的結果」とを区別する企図である顕在機能と潜在機能との区別

は、前述のように表顕的な現象の奥にかくれた目的をあばき出すねらいであるが、一方では機能の特殊事例として「主観的諸状態」を見る無理と、他方では「主観的意図」を「客観的結果」にこのような姿で結びつける無理とをとまなう。スティンチコウムは「行動の結果はその主要原因である」として、欲求を等・目的的 (equifinal) と見る対策を提案するが、ギデنزはこれを認めない。意図や欲求の実現を求める願望こそが行動の原因であって、それらの達成された状態は別途のものである。〔4:107〕ところでマートンにおいて「意図されない」結果と「予想されない」結果とが同義語として用いられることがあるのは彼の潜在機能の概念を曖昧にする。〔ibid.〕さらにはギデنزが潜在機能が存在するについては、特定の機能の結果であるべきことを意図して（或いは知っていて）或る行為を企てなければならぬのか、と問う。〔4:108〕また潜在機能があるためには或る項目の、どの機能について、誰が意図し、知っているのかをマートンは明らかにしない。〔ibid.〕——ところでこれについてのギデنزの1979年の批判はさらに徹底的である。上に述べた区別の決定的誤謬は「行為の（意図されない、或いは予想されない）諸結果についての同意を、この行為の実行（および持続）についての説明と見るところ」〔5:211〕にあるとする。或る所与の社会的項目或いは社会的慣行が、よりひろい社会体系の再生産において或る役割を演じ、しかもそのことが慣行の当事者である行為者にも、また他のいずれの者にも意図されず、知られることもないという事実はその慣行が行う役割を何故に演ずるのか、またそれが反復的社会的慣行として何故に持続するのか、を説明し得ない。〔ibid.〕ギデنزは潜在機能と潜在機能に関するマートンの、権威ある、ひろい支持をうけた区別に対して真正面から挑戦するのである。この区別を逆転するこ

ともできると彼は主張する。「社会の安定性或いは社会における変動を分析するのに説明的な意義をもつ、ただ一つの種類の『機能』こそはマートンが顕在機能と称するものである。換言すれば社会の成員ら自らが社会諸体系の再生産における行為の結果に関する知識の応用を通じて、知覚されたニーズに計画的な帰結を装備することを能動的に企図するときこそ、社会的再生産の目的論的説明は社会分析において演ずべき何らかの役割を有するのである。〔ibid.〕マートンの区別の不条理についてギデنزは前者の挙げるホピ族の雨乞い儀礼に関連して究明する。第一にマートンのいうように、それが表向きの意図——雨を降らせる——ではなく、地域社会の同定ないし凝集をたかめるという「潜在機能」をもってしても、この慣行が持続することを説明し得ない。持続の説明としては、この種の社会体系そのもののニーズ、目的ないし理由の媒介に頼るか、或いは「適応的残存」の原則の支持に待たざるを得ない。一貫してギデنزは行為者の主体性を尊重するのであるが、慣行の持続を行為者の準拠点としての「伝統」に重点をおく人類学者の処置を、マートンのそれよりも優れていると見るようである。

さて本論にかえて1977年批判の第二の点、すなわち機能理論の第二の趣旨に関する問題をとりあげたい。これについてのギデنزの結論は「機能理論はその首部用語である『機能』の目的論が余分であるか、誤って用いられた社会理論である」ということである。〔4:109〕ところで機能分析は因果分析であるのかの問題に対して、最も明示的な答を提示するのはスティンチコウムである。彼は機能分析が因果分析の特殊類型、すなわち前述のように行為の結果が「その原因の要素」であるような「反転された」因果分析であるとする。等目的性によって解明される homeostatic process がその例となる。hom-

eostasis は「因果環」として因果性をもつとともに体系との結びつきのもとに機能的でもあり得る。ステーションコウムの見解に代弁されるように機能理論は因果分析とも吻合し得るのである。したがってこの場合の体系ニーズは生物学的体系の場合のように、それ自体が成立するし、「欲求」や「利害」をむしろ予定しさえする。しかし社会体系の場合には体系ニーズは「行為者たちの欲求を前提することが承認されていなければ誤って使用されたこととなり、それ自体の利害をみとめることも誤っている。社会体系そのもののニーズが否定されるならば、機能の観念は余分のものとなる。」〔4:111〕機能概念を利用する諸種の叙述が社会概念の類語反復以外のものでないこともすくなくない。したがって社会体系についての機能分析そのものが必要ではなくなる。このようにしてマートンの「コロンブスの卵」とならぶ「開け、胡麻」はその正体を暴露する。

IV

機能理論の基本的趣旨の第三は「体系」と「構造」との概念の関係に関する。これについてのギデنزの批判の結論によれば、「機能理論或いはもっと特殊的には構造・機能理論は体系と構造とを誤って同一視する。」〔4:112〕体系と構造という用語は「構造・機能理論の文献においては慢性的にあらわれる。」〔ibid.〕とギデنزはいふ。「体系」については「身も心もすべてをあげてとりくむ」パーソンズとは対照的にマートンがつねに細心の注意をはらうことについては、グッドナーの指摘に関連して前述した。特に包括的な社会体系を直接に分析の対象とすることはない。しかし体系の観念そのものが否定されるのではない。初期の著書では索引に一度しか姿を見せない「社会体系」も用語としては以後の著述をふくめて、いたるところに散見さ

れ、その多くが便宜上の使用に供されるにしても、たとえば小集団に関連する場合のように社会的結合の複合形態の体系的性格は明確に把握されている。社会学における体系概念の展開は並行的に生物学およびその他の諸科学において一般化された体系諸概念ならびに General Systems Theory における学際的ひろがりにおいて支持される統一理論に現われるそれから遊離され得ない。このことは「規範的機能主義者たち」から、一般体系理論の関連において包括的に考える W. バックリーまでの社会体系を通じて言えるのである。

「構造」についてはどうであろうか。ところで構造概念に関連して、(1)機能理論において典型的な「表面的特殊事項において識別可能な型」〔4:113〕或いは「行為の安定的な型」〔4:122〕、(2)構造主義における「表層の直接に観察される顕現を説明するものとして探求される深層構造」、(3)「構造の二重性」の水準までたかめられ、社会の生産と再生産をも包括する理論体系としての「構造化」理論の中に位置づけられる構造概念の3通りのものが区別され、その概念内容はきわめて異なる。ギデنزの次の課題は(1)、(2)を通じて(3)にいたる構造問題の推移を背景として吟味すること、さしあたり(1)を検討することから始まる。(1)はそれが「識別可能な型」として散漫に使用されるので、「機能化」が加えられて始めて「行為の相互依存」としての体系になるのに、両者が同等のものとして、マートンにおいては相互交換のできるものとして取りあつかわれる。〔ibid.〕ここでギデنزは「そのうえマートンはその論議の相当部分を機能の無差別使用を訂正することに貢げるのに、構造については比較できる分析を提供しない。」〔ibid.〕と非難する。しかしこのギデنزの非難にもかかわらず、構造に関しては初期の著書の書名が示すとうり、この大著の後半をあげてそ

の分析にあて、しかも最近の論文「社会学における構造分析」〔9〕はこれをもっぱらとりあげる。ギデنزがマーソンのこの論文を1979年著書の参考文献中に含めているので構造分析に示すマーソンの熱意については知悉していると思われるが、彼の現在の考えかたについては改めて検討する機会をギデنزとともにもちたい。ところで本質的な事実はマーソンにおいて、たしかに「構造分析」の用語はますます頻繁に使用されるのであるが、その内容のそれに対応する充実はみとめられないことである。かつての「機能分析」に代えて「構造分析」が置かれたり、構造主義への傾斜がますます濃厚にみとめられることも著明な意味あることに思われる。

構造と体系との同一視は「構造」、「機能」、それらの統一としての「体系」の概念的整理が不充分であるという事情のためである。したがってたとえば『機能する構造』が構想されるが、その場合には体系概念はすでに必要がなく、位置すべき場所もない。同様に「機能する体系」は構造の概念を余分のものとする。それらのことはすべて構造・機能主義における体系概念の不適正を改めて示すものである。そこでは体系が構造から明確に区別されず、「諸部分の相互依存」がきわめて狭く限定されて考えられる特殊なとり扱いによるのである。〔4:114〕詳しく言えば（一）homeostaticな因果環、（二）フィードバックによる自己制御、（三）反省的自己制御として考えられた行為の相互依存としての体系のうちで、せいぜい（一）から（二）の間を迷走し、多くの場合、（一）に固執する状態を物語る。

V

最後に機能主義における変動の問題をめぐるギデنزの批判に移りたい。「機能主義に対する批判者らは一再ならず、この理論が闘争の理

論も、社会変動の理論も、ともに提供しないと主張した。これが誤っていることは容易にわかる。〔4:119〕とギデنزはいふ。マーソンに限定していえば、彼にとって闘争は社会構造の体系的産物として必然性をもつ現象である。役割、準拠集団、制度の構造が不可避に闘争を誘発する。しかも闘争は逆機能を付帯する。「闘争は逆機能であり、それは社会の無機能化をともしない、破壊的で、体系分裂的な力である。」そのような「体系の順応ないし適応を減退させる結果」は構造面での負担と緊張を帯同するのであって、社会変動につながる。〔7:176-177〕しかしここにマーソンの見解の限界があるのであって、以前ダーレンドルフは闘争についてのマーソンの見解が「機能分析の発展に著しい進展を示す」と評価しながら、「変動の分析に橋を架すのに充分足りるかは、きわめて疑問のあるところである。〔1:6〕とした。「闘争に関する機能的思考の第三段階」を示すコーザーの処論によって補われねばならないという含意がひそめられている。

「闘争の逆機能」の観念に対するギデنزの姿勢はもっと厳格である。もともとマーソンにおける「機能」が社会概念の中に包括される諸要因の特定のものの指名ないし翻訳であって、社会学的分析にとって余分のものであるとされることについては前述したが、逆機能も同一の理由で余分のものであろう。しかも逆機能の変動との結びつきについては、単にふれる程度の示唆が見られるだけで、変動に関する本格的な分析も、また他の機能主義者の通例と異なり、「変動についての原理的な機能主義的論述、すなわち社会進化の理論」〔4:119〕への展開も見あたらない。ギデنزが1979年著書において時間性の問題との関連で、機能主義における変動概念をとりあげる。ここでも機能主義者たちが「時間に関心をもたなかったと言うのは、いうまで

もなく正しくない。』(5:198)とする。とはいえ、その場合「時間を通時的ないし動学的なものと同視し、共時的分析とは『無時間のスナップ写真』を提供することとし、それらを通じて時間が社会変動であるという結論に達する。』(ibid.)とギデンスはいう。しかも時間=変動の等式の裏は「無時間性」ないし静態性=社会的安定性に定式化される。これら表と裏の等式が「基本的な誤り」であるのはもちろんである。(5:201)ところで時間の有無が媒介する二つの等式を圧縮すると、安定性についての説明が変動を説明するというように安定と変動とが関係する。この安定性が対立や矛盾の要素を含まないものであれば、それは変動についての理論とはいいいにくく、むしろ変動否定の理論である。

ところで社会的安定性の分析が社会変動を説明するという主張が社会体系の共時性と通時性との分離に基礎をおくことがある。しかしこの基礎は安定性と変動とを結びつけようがない。その意味では共時性と通時性をつねに区別する機能主義は変動理論を措定し得る立場にないとも言える。ギデンスはこの分離に代えて「構造化」の概念を置くことによって「変動の可能性が社会的再生産の、いずれの状況にも固有のものである」(5:210)と認められることになるとする。

「構造」概念の三つの類型——すなわち「表面的特殊事項において識別可能な型」、表層的事象を説明するものとして探求される深層構造、「構造の二重性」に関連する構造概念——は、それぞれを代表する(一)機能主義、(二)構造主義、(三)構造化理論の特色を象徴する。ギデンスが主として意図するのは(一)と(二)に対する批判を通じての第三の道の開拓である。

機能主義批判の現状は、したがって単に、「機

能」から「構造」へ、或いは「機能主義」から「構造主義」への移行ではなく、それらがともに止揚される、ギデンスならば「構造化理論」と呼びたい新たな社会学体系の確立が待望される段階である。彼はすでに1976年デュルケイムの「社会学的方法の規準」に野心的な new を添える著作の発刊以後、ほぼ毎年、内容充実した出版を重ねている。これらを通ずる検討の機会をわれわれは改めてもちたい。

参 照 文 献

(本文中、括弧内の：の前の数字は以下の目録に頭書された番号、後の数字はその引用または参照頁数を示す。)

1. 拙稿「ダーレンドルフにおける機能主義批判」大阪市立大学文学部紀要「人文研究」第20巻第1分冊1—28頁。
2. Dahrendorf, R.; *Pfade aus Utopia. Arbeiten zur Theorie und Methode der Soziologie.* München, 1967.
3. Abrahamson, M.; *Functionalism.* New Jersey, 1978.
4. Giddens, A.; *Studies in Social and Political Theory.* London, 1977.
5. —; *Central Problems in Social Theory.* Berkeley and Los Angeles, 1979.
6. —; *New Rules of Sociological Method.* New York, 1976.
7. Merton, R. K.; *Social Theory and Social Structure.* New York, London, 1968.
8. —, “A Discussion” as to the article by T. Parsons, “The Position of Sociological Theory,” *ASR*, vol. 13, No. 2.
9. —, “Structural Analysis in Sociology,” in *Approaches to the Study of Social Structure*, edited by P. M. Blau. New York, London, 1975.
10. Dahrendorf, R. *Die Angewandte Aufklärung usw.* München, 1963.
11. Coser, L. (ed.); *The Idea of Social Structure.* New York, 1975.
12. Mills, C. W.; *The Sociological Imagination.* Penguin Books, 1975.
13. Parsons, T.; *Essays in Sociological Theory.* The Free Press, 1954.
14. —, “General Theory in Sociology,” in *So-*

- ciology Today*. edited by R. K. Merton, L. Broom and L. S. Cottrell, Jr. Harper Torch Book, vol. 1, pp. 3—38.
15. Gouldner, A. W. ; “Reciprocity and Autonomy in Functional Theory,” in *System, Change, and Conflict*, edited by N. J. Demerath and R. A. Peterson, The Free Press, 1967, pp. 141—169.
16. 拙稿「社会学における類推の問題——比較方法に関連して——」明星大学社会学科研究報告 第十二集 25—39頁。
- (あんざい ふみお 本学教授)